

# 上野の杜の 波瀾 万丈

第十四回

## 東京音楽学校邦楽科への長い道のり 前篇

橋本久美子

西洋音楽こそが普遍的かつ合理的な音楽である。——  
進化論的音楽観をもとに進められた奇想天外な音楽教育。

### 進化論的音楽観

邦楽が進化すれば、やがて西洋音楽のように広く共感を得る音楽になっていくという、今聞けば奇想天外な考え方が明治十年代、二十年代にはあった。

わが国の音楽教育の礎を築いた伊澤修二は進化論の紹介者でもあった。彼が明治二十二年(一八八九)年に訳したT・H・ハックスレー講述『進化原論』(丸善商社)緒言に伊澤曰く、「進化論は益々学問社会に勢力を得て、其理論は(中略)心理学にも、倫理学にも、言語学にも(中略)皆之を適用いたし(中略)殊に教育学の一科に於ては、人類の研究に就き、進化論に依る可きことが、頗る多くあります」

明治八(一八七五)年に渡米した伊澤は、教育学、生物学などを学び、ダーウィンの進化論に出合う。日本に最初に進化論を紹介したのは大森貝塚の発見者E・S・モースで、彼が同十年に東京大学で行った講義『動物進化

論』は同十六年に石川千代松訳で世に出るが、伊澤はその四年前にハックスレーの“On the Origin of Species 1863(種の起源)”の始めの二章『生種原始論』を訳し、十年後に完成版『進化原論』を刊行。かくして進化論的音楽観においては、西洋音楽こそが普遍的かつ合理的な音楽であり、邦楽と洋楽の違いは進化の度合いにあり、様式、美意識、民族性などは斟酌の外に置かれた。

伊澤と大学南校の同期生に、(箱根八里)の作者鳥居悦が、音楽取調掛の第一回伝習生で、東京音楽学校教授として大正初期まで国語と音楽理論を教えた。伊澤の考え方に共鳴して曰く「日本音楽は随分発達して居るもの、また(独楽の即ち偶感的音楽の境界は脱しません然るに西洋音楽は実に科学の物にて其目的は共楽的の音楽にて音楽も是に至りて始めて成せるものであります」(『千葉教育会雑誌』第一二〇号、明治二十一年)。当時は、邦楽が科学に基づいて進化すれば、国を越えて共感されると考えられ、実際に端唄や長唄の歌詞を上品なものに「改良」することも行われた。

### 東西二洋の演奏で卒業

「東西二洋ノ音楽ヲ折衷シテ新曲ヲ作ル事」を事業計画の筆頭に掲げた音楽取調掛は、笙、笛、箏、箏、琵琶などを購入し、演奏会では「螢の光」を「本邦雅俗及西洋管絃楽器ヲ悉ク混用シテ合奏」した。明治十八(一八八五)年七月、音楽取調所(音楽取調掛は明治十八年二月に音楽取調所と改称、同年十二月に再び音楽取調掛)第一回全科卒業生の三名は、幸田延がピアノとバイオリンと箏、遠山甲子(かね)がピアノと箏、市川ミチがピアノと胡弓など、東西二洋の演奏で卒業した。

ところで、音楽取調掛時代には東西二洋が保たれていたのが、東京音楽学校時代には西洋一辺倒になったという見方があるが、音楽取調掛が西洋音楽に習熟することで日本の音楽を補い国楽を興すという構想のもと始まったことを想起すれば、むしろ軸足は当初から洋楽にあり、次第にその結果が顕著に現れてきたということ

ではなからうか。

東京音楽学校では初期の師範科生徒が箏を学び、明治四十二(一九〇七)年には邦楽調査掛が置かれ邦楽演奏会が開かれるようになった。大正に入ると能楽囃子生徒養成規程が設けられ囃子と囃子の指導が行われた。また満九歳以上の男女に広く専門実技を指導した「選科」は洋楽で始まり、明治四十二年に箏が加わった。

### 邦楽科の設置

しかし昭和四(一九二九)年、選科に長唄を加え、さらに流派を拡充して邦楽がとみに存在感を増したのは、同三年に着任した乗杉嘉壽校長の施策である。官立音楽学校なら邦楽を教えよ、邦楽を「西洋音楽と対等の位置に」(『三曲』昭和五年三月)との信念で、同十年に行われた選科邦楽の京都大阪演奏旅行では、生徒の旅行記によれば「校長先生は、未だ世間が正座に据えない邦楽の為に万丈の気焔を吐かれる。論旨は旺んなものであつたが、至る処に諧謔が交つ





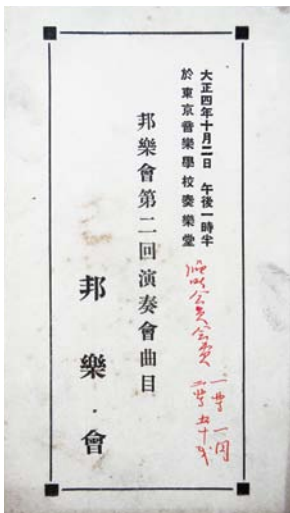
、頃長に科本らか産年本、れま恵に運氣の現置く漸も望宿の相文元由松故たし張主を徴明體國に界邦本  
の長枚杉乘時八前午日五十二め集を生科選、生入新、はで校、業音京東、上たし定決に設新科各華、能  
(てに前蓋は眞寫) たつ行をり斷禮おに基おの相文元由松人恩てつ揃ち打同一鏡示訓



上野の東京音楽学校邦楽科はアマチュア田手の調料だつたが、故松田文伯の音楽による國體明徴實現の主旨を體して乗杉校長年來の宿望成就、本科に長唄、能、箏各科を新設することになつたので、恩

邦楽科創設の辯

入故松田文相のお墓へお詣りするとなり乗杉校長は廿五日午前八時、新入生並科生等を講堂に集め、訓示の後、展覧した(寫眞は乗杉校長の訓示)



大正四年十二月一日 午後一時半  
於東京音楽学校樂樂堂  
邦樂會第二回演奏會曲目  
邦樂會

東京音楽学校邦楽科設置を伝える新聞記事。上：時事新報 昭和11年6月26日 下：やまと新聞 昭和11年6月26日 右手前乗杉校長 (『昭和11年6月 新聞切抜帳第46号東京音楽学校』大学史史料室所蔵)

大正4年の邦楽會第二回演奏會プログラム。邦楽調査掛に関係ある各流各派の家元等が協同で出演した。富本、一中、江戸長唄、常磐津、河東一中かけ合い、新内、清元、長唄の各曲目(大学史史料室所蔵)



演能會プログラム。昭和6年、7年、8年(大学史史料室所蔵)

次号予告  
「東京音楽学校邦楽科への長い道のり」後篇  
橋本久美子  
科として設置された邦楽科。それからの活動、そして敗戦、新制大学への構想までの概要を紹介する。

て聴者も肩が凝らない」(『同声会報』二二二号)。校長の熱弁は、生家の富山の浄土真宗寺院で一年中間こえた説教と響き合っていたのだろうか。昭和十一(一九三六)年六月、東京音楽学校邦楽科が設置された。音楽取調掛創設から五十七年目である。三十三名の受験生から十八名を合格させ(翌年三月の生徒名簿では十七名)、六月二十五日に入学式が行われた。式辞で乗杉は、邦楽科設置は伊澤初代校長の「東西二洋」の具現であると述べるが、本当のところは、伊澤の時代にはその扱い方について答えの出せなかつた邦楽を、初めて音楽学校の一専攻として位置づけた点で画期的であつたといえよう。

(はしもと・くみこ)総合芸術アーカイブセンター大学史史料室特任助教・音楽学部非常勤講師)